〈紹　介〉

福島　一浩著
「書の古典とかなの書」―思索と実践Ⅰ―
「寸松庵色紙」（虚・実）（波動）（空間）
「継色紙」（余情の響き）（崇高・壮大・空間）（残響）

源　川　彦　峰

福島先生は、平成十七年の十一月に銀座で個展を開催され、その折り「福島一浩書作展図録」を出版、それに合わせて「書道・かな」（共に全日本書道教育協会出版）を出版されています。その氏が今年の二月、三月、四月に立て続けに三冊のかな関係の書物を出版（かなの書研究会出版）されました。氏には永年にわたって本学のかなの授業を担当して頂いております。氏は、日展理事・水穂会会長の日比野光鳳に師事し、日展、読売展にも出品されるかな書きの名手でもあります。先の「書道・かな」は学生用のかな指導の解説書的な書物でしたが、この度出版の三冊はかな研究の集大成とも言える労著で古筆における書美の謎を科紙の使用上からくる文字との調和、墨色の濃淡によるハーモニーによる気品の醸成といった観点から研究をされております。「寸松庵色紙」、「継色紙」の個々の作品については、散らしの構成、構図を細密に図式して分析し、詳細な解説を施している。そして、その部分部分に「虚と実」、「波動」、「余情の響き」「残響」と指摘し、それぞれの空間構成の巧みさを指摘し、古筆の書き手の創造力を分析している。一方「書の古典とかなの書」―思索と実践Ⅰ―は、自らの作品制作に当たって他の古筆の筆意、筆勢から、構成、構図のエキスを吸収し、それを反映させた作品に創作し、そのポイントについて要諦を遺憾なく説いておられる。例えば「本阿弥切」、「関戸本古今集」、「高野切」、「中務集」、「小島切」の古筆や、空海、最澄、佐理、良寛、光悦にもヒントを得て思索性と崇高さを高め壮大な空間構成を実践している。それはただ書作のための書作ではなく一種の禅の行道者のようでもある。